

2012 FIA F1世界選手権シリーズ第15戦 日本グランプリレース メディアインフォメーション Vol.14

2012年10月4日
株式会社モビリティランド
鈴鹿サーキット

ミハエル・シューマッハ伝説

F1 史上最高の7度のチャンピオンに輝いた男



2011年F1日本グランプリでのミハエル・シューマッハ

21歳の秋、人生をかけ勝負に挑んだ1990年F3マカオGP

ミハエル・シューマッハの名が世界に広まったのは1990年のF3マカオGPだった。当時、アイルトン・セナを輩出したイギリスF3がF1に最も近いと言われ、そこでチャンピオンを獲得したミカ・ハッキネンが若手ナンバー1と目されていた。シューマッハはドイツF3でチャンピオンを獲得するものの、世間の注目はすべてハッキネンのもとへ。レース界のジュニアクラス世界一決定戦とも言われ、各国のF3シリーズで上位を獲得したドライバーが集まるマカオGPが、シューマッハにとって自分の名を知らしめる最後のチャンスだった。

予選が始まると前評判通りハッキネンが好タイムを記録。これまでセナが持っていた2分22秒02のコースレコードを大きく更新する2分20秒88を記録。シューマッハもコースレコードを記録するがハッキネンに及ばず2位。決勝レースは第1レースと第2レースの合計タイムで順位が決まる方式だったが、ハッキネンは第1レースでシューマッハに3秒近い差を付けて優勝。これで後がなくなったシューマッハは第2レースに自分の人生をかけ、全神経を集中させて臨んだ。

第2レースがスタートするとシューマッハがトップに浮上。しかしハッキネンが予選より速いタイムで追いかける。そしてファイナルラップ。ハッキネンは僅差の2位でも合計タイムで優勝となるが、もちろんそんな勝ち方は望んでいない。ストレートで執拗にトップに迫るハッキネン。シューマッハは抜かれたら万事休すだ。勝負をかけスリップストリームから出ようとしたハッキネンに対し、全神経を集中させていたシューマッハはその動きに合わせてきた。ハッキネンは勢い余って追突しリタイヤ。シューマッハはリアウイングを失いながらも走りきり、まさに“死闘”と言える激しい戦いを制したのだった。

ハッキネン22歳、シューマッハ21歳の秋。シューマッハはその若さで自分の将来をつかみ取るため、最高の結果を導き出したのだった。続く富士スピードウェイでのインターF3リーグでもシューマッハが優勝。その結果、一気に若手ナンバー1ドライバーとして世界が注目するようになった。

ドイツの後進に道を開いた94年F1初タイトル

メルセデスの育成ドライバーとして翌91年はスポーツカー世界選手権(SWC)に参戦し続け、F1第11戦ベルギーGPにジョーダンからスポット参戦。決勝はトラブルでリタイヤとなったが、予選でいきなり7位の活躍を見せ、これがきっかけでベネトンがシューマッハを獲得。第12戦からレギュラードライバーとしてF1に参戦した。そして92年はベネトンを表彰台の常連チームへと導き、ベルギーGPで自身初優勝を記録。93年も1勝を挙げ、完走したレースはすべて表彰台という記録を打ち立てた。

そして迎えた94年は開幕4連勝。後半戦でウィリアムズのデimon・ヒルが巻き返しを図るが一步及ばず。シューマッハはF1参戦4年目にして見事ワールドチャンピオンに輝いた。シューマッハの登場までドイツ人は計3勝しか挙げておらず、1961年にチャンピオン争いをしたヴォルフガング・フォン・トリップスも1ポイント差の2位で終わっている。これまでF1界ではドライバーとして成功出来なかったドイツを、シューマッハはトップの国へと押し上げたのだ。通算6勝を挙げた弟のラルフ・シューマッハ、そして2度のワールドチャンピオンに輝き、今後もF1界を担って行くセバスチャン・ベッテルなどの後進に、シューマッハは大きな道を残したのだ。

逆境を乗り越え、フェラーリをトップチームへ導いた90年代後半



2000年日本グランプリ
表彰台でのシューマッハ

続く95年はヒルを大きく引き離し2年連続チャンピオンに。しかし翌年はベネトンを離れフェラーリへ移籍。当時戦闘力が低かったフェラーリを再びトップチームへ押し上げるべく、自ら厳しい状況に身を置いたのだった。その努力はすぐに実を結び始め、96年は自身3勝を挙げ、フェラーリもコンストラクターズチャンピオンシップ2位を獲得。その後97年の全ポイントなく奪や99年の怪我など多くの障害を乗り越え、チームメイトのエディー・アーバインとシューマッハの代役ミカ・サロとのタッグで、フェラーリは99年のコンストラクターズチャンピオンを獲得。見事フェラーリをトップチームへと導いたのだった。

そして迎えた2000年。98・99年の連続チャンピオンで、91年F3マカオGP以来のライバル、ハッキネン(マクラレン)とのタイトル争いは第16戦日本GPまでもつれ込んだ。シューマッハは7勝を記録し88ポイント。ハッキネンは4勝だが着実に表彰台上り80ポイント。残り2戦、ハッキネンの前でチェッカーを受ければタイトルが決まる状況だ。予選でポール・ポジション

を獲得するものの、ハッキネンも2番グリッドと引き下がらない。決勝レースも僅差の展開となったが、ハッキネンの追撃を振り切りトップチェッカー。みごと鈴鹿でフェラーリ移籍後初となる、自身3度目のタイトルを手にしたのだった。



フェラーリ時代のシューマッハ
(2000年日本グランプリ)

前人未到の7度のタイトルを獲得。偉大なドライバーが得意の鈴鹿にやってくる

ここからシューマッハ&フェラーリの時代がスタート。2004年までの5年連続、計7回のワールドチャンピオンという前人未到の偉大な記録を達成した。グランプリ初期の時代をけん引したファン・マヌエル・ファンジオが5回(1951・54・55・56・57年)、80年代から90年代前半に活躍したアラン・プロストが4回(1985・86・89・93年)という事を考えると、7度のタイトルはとてつもなく偉大な記録だという事がわかる。そして優勝回数も91回と、2位のアラン・プロスト(51回)を大きく上回るなど、半世紀以上に渡るF1グランプリの歴史で、最速・最強のドライバーがここに誕生したのだ。その偉大なドライバーが今年も鈴鹿で、その走りを披露してくれる。

2007年に一度ステアリングを置き、10年にメルセデスから復帰したシューマッハ。まだ復帰後の優勝はないが、フェラーリ移籍後も同じように苦労した。そこから這い上がり結果を出してきたのがシューマッハだ。また鈴鹿F1日本GPでは過去に6度の優勝を記録している。それに続くアイルトン・セナ、ハッキネン、ベッテルの2勝と比べると、これまでの誰よりも鈴鹿を得意としている事は間違いない。今シーズンは予選3位3回・1位1回、そして復帰後初の3位表彰台を獲得するなど、一歩ずつ優勝に近付いている。ルイス・ハミルトンのメルセデス移籍により、来季の去就に注目が集まるシューマッハだが、2012年F1日本GPで、再び表彰台の中央に立つ姿に期待したい。



※写真はイメージです

■ミハエル・シューマツハF1での戦績

年	チーム	シーズン戦績			鈴鹿での戦績	
		優勝回数	ランキング	備考	予選	決勝
1991年	ジョーダン ↓ ベネトン	最高位5位	14位	※第11戦より6レースに参戦	9位	リタイヤ
1992年	ベネトン	1勝	3位		5位	リタイヤ
1993年	ベネトン	1勝	4位		4位	リタイヤ
1994年	ベネトン	8勝	チャンピオン		PP	2位
1995年	ベネトン	9勝	チャンピオン		PP	優勝
1996年	フェラーリ	3勝	3位		3位	2位
1997年	フェラーリ	5勝	失格(2位)	※ペナルティで全ポイントはく奪	2位	優勝
1998年	フェラーリ	6勝	2位		PP	リタイヤ
1999年	フェラーリ	2勝	5位	※怪我で7戦欠場	PP	2位
2000年	フェラーリ	9勝	チャンピオン		PP	優勝
2001年	フェラーリ	9勝	チャンピオン		PP	優勝
2002年	フェラーリ	11勝	チャンピオン		PP	優勝
2003年	フェラーリ	6勝	チャンピオン		14位	8位
2004年	フェラーリ	13勝	チャンピオン		PP	優勝
2005年	フェラーリ	1勝	3位		14位	7位
2006年	フェラーリ	7勝	2位		2位	リタイヤ
2010年	メルセデス	最高位4位	9位		10位	6位
2011年	メルセデス	最高位4位	8位		7位	6位
2012年	メルセデス	最高位3位	12位	※第14戦終了時点	10月7日(日)決勝	

- ・決勝レース出場回数:300回
 - ・優勝回数:91回(1位)
 - ・ポール・ポジション:68回(1位)
 - ・ファステストラップ:77回(1位)
- ※すべて2012年第14戦終了時点